

# イーハトーブの世界

——宮沢賢治の文学空間——

工 藤 茂

## 1. イーハトーブとは？

イーハトーブという語は宮沢賢治の造語である。彼はイーハトヴ童話と角書きのある童話集『注文の多い料理店』を上梓するに当たって、次のような宣伝のチラシを刷った。

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパアンタル砂漠の遥かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中に、この様な情景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

これはその冒頭の部分である。後に書く「グスコブドリの伝記」では「イーハトーブ」となる地名は、ここでは「イーハトヴ」と表記されている。「イーハトヴ」というのは、<大小クラウスたちの耕してゐた>アンデルセンの童話の世界、ルイス・キャロルのアリスが辿る鏡の国、インドの詩人タゴールが母にねだって聞く妖精譚の中のテパアンタルの砂漠、イワンの出てくるトルストイの民話の世界といった、世界的空間に位置する、宮沢賢治の心象の中のドリームランドとしての日本岩手県である。つまり、この空間は世界の著名な文学者によって創造された名高い文学空間に位置付けられた、賢治自身の文学空間を意味する言葉であった。チラシのこの言葉に、私は童話集『注文の多い料理店』を刊行する賢治の高い自負心を読み取ることが

できる。

ところで、この言葉は一体何語であろうか。ドイツ語、フランス語、英語、それとも、エスペラント語。恩田逸夫はこの語について、以下のような優れた見解を示している。

<この語の早い時期の用例としては、『春と修羅』のなかの作品の題名、「イーハトヴの氷霧」(大12・11・22。後に「イーハトヴ」と改めている)がある。他にイーハトーヴォ、イーハトーボなどの類例もあって、地方・県・河・火山・海岸の名称とし、農学校・警察署・停車場などにもこの語を冠し、他に、「イーハトヴ日日新聞」もあれば、「イーハトヴの友」という名の酒もある。これらの造語は<イハト、イーハト、イーハトー>など、長音の有無の別はあるが、基本的には「イハト」で、「いはて(岩手)」に由来すると推定される。それは、賢治の童話集『注文の多い料理店』(大13・12・1)の出版広告「新刊案内」のなかで「イーハトヴは一つの地名である。(中略)実にこれは著者の心象中に、この様な情景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である」と記しているからである(傍点は原文のまま)。つまり、「岩手」の歴史的仮名づかい、「いはて」に基づいて<いはてihate>のteを、エスペラントの名詞の語尾づくりのように母音Oで終わる語として<ihate→ihatoイハト>としたのであろう。

そして、岩手県の県に当たるところは、ドイツ語で「場所」を意味する<wo ヴォ>をつけて、<イハトヴォ(=岩手というところ=岩手

県) > と造語したのであろう。「ヴ・ブ・ボ」を「ヴォ」と同じに用いていることは、いうまでもない。 > (注1)

『宮澤賢治語彙辞典』(注2)はこの恩田説を踏まえた上で、更に次のような新説を紹介している。

< (略) 日本神話の「<sup>アマ</sup>天の<sup>イハト</sup>岩戸」に由来するという説もあるが、最近ではドイツ語の<sup>イヒ ヴァイス</sup>Ich weiß<sup>ニヒト</sup>night (注3) wo (英語ではI don't know where. 『莊子』にある「<sup>むかう</sup>無何有の<sup>きと</sup>郷」、つまり楽土、理想郷、パラダイス) から賢治は思いついたとする竹下数馬の推定 > もある。だが私には、これらの説よりも先の恩田説の方が賢治のその他の造語例に照らして妥当ではなからうか、と思われる。

## 2. ドリームランドとしてのイーハトーブ

前節において見てきたように、「イーハトーブ」の表記には決定稿がない。そこで私は、拙文の内容から考えて、最も妥当と考えられる「グスコープドリの伝記」のなかの表記と同じ「イーハトーブ」を、ここでは使うことにする。

さてこの節では、ドリームランドとしてのイーハトーブについて考えていってみたい。

そこでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。

罪や、かなしみでさへそこでは聖くきれいにかまやいゑる。深い掬(「<sup>く</sup>掬」<ひのき>の誤植か)の森や、風や影、肉之草(「<sup>く</sup>月見草」の誤植か)や、不思議な都会、ベーリング市迄続々(「<sup>く</sup>」の誤植か)電柱の列、それはまことにあやしくも楽しい国土である。

賢治は前節で引用したチラシの文章に続けて

上のよう書いている。まさしくそこは、ユートピアである。空を飛ぶこともできれば、昆虫と話すこともできる、罪でさえも聖くきれいにかがやく田園である。いや、そこには不思議な都会さえある。そればかりではない。透明な風や朝の日光も素晴らしい食べ物や飲み物になり、みずばらしい野良着もピロードや羅紗や寶石入りの着物に変わるドリームランドなのだ。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろの美しい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびらうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。

わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

この後に、<これらのわたくしのおはなしは、>と続くように、これはイーハトヴ童話『注文の多い料理店』の「序」の冒頭である。従つてこの文章は、イーハトーブの世界の特色を示すと同時に、この童話集に収められた童話の世界を読者に示唆するものともなっているのである。そこには、次の九編の童話が収められている。

どんぐりと山猫  
狼森と叢森、盗森  
注文の多い料理店  
鳥の北斗七星  
水仙月の四日  
山男の四月  
かしはばやしの夜  
月夜のでんしんばしら  
鹿踊のはじまり

先に引用した「序」で著者はこれらの童話に

ついて、くみんな林や野はらや鉄道線路やらで、  
虹や月あかりからもらつてきたのです。ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたしはそのとほり書いたまでです。>と言いくこれらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。>と結んでいる。

さて、イーハトーブの朝は次のように始まる。

小麦粉とわづかの食塩とからつくられた  
イーハトヴ県のこの白く素朴なパンケーキ  
のうまいことよ

はたけのひまな日あ百姓がじぶんでいち  
いち焼いたのだ

顔をしかめて妒ばたでこれを焼いてると  
赤髪のこどもがそばからいちまいくれと  
いふ

あの百姓は顔をしかめてやぶけたやつを  
出してやる

そして腹ではわらつてゐる

林は西のつめたい風の朝  
味ない小麦のこのパンケーキのおいしさよ  
わたくしは馬が草を喰ふやうに

アメリカ人がアスパラガスを喰ふやうに  
すきとほつた空気といつしよにむさぼりた  
べる

こんなのをこそSpeisenとし云ふべきだ

……雲はまばゆく奔騰し

野原の遠くで雷が鳴る……

林のバルサム匂ひを加へ

あたらしい晨光の蜜を塗つて

わたくしはまたこの白い小麦の菓子をつたべ

る (詩「心象スケッチ朝食」)

「Speisen」とはドイツ語で「食事をする」の意。バルサム (balsam) とは『広辞苑』によると「植物から分泌される樹脂が揮発性油に溶解しているものの総称」というから、樹脂の匂い、林の匂い、とでも考えたらよかろう。

一読して、この詩にはヨーロッパ風の雰囲気漂っていることが分かる。それはこのような用語のせいばかりではない。百姓の焼いたパンケーキの朝食をとる環境全体に、ヨーロッパの田園風景が重なっているからなのだ。イーハトーブとはこういう空間なのである。

それでは、イーハトーブの夜とはどんな夜であろうか。「かしはばやしの夜」によると、柏ばやし柏の木たちが、清作を迎えて次のような歌を歌う夜もあれば、でんしんばしらの兵隊が行進する月夜（「月夜のでんしんばしら」）もある。

こよひあなたは ときいろの  
むかしのきもの つけなざる  
かしはばやしの このよひは  
なつのをどりの だいさんや

やがてあなたは みづいろの  
けふのきものを つけなざる  
かしはばやしの よろこびは  
あなたのそらに かゝるまゝ

<「うまいうまい。よしよし。夏のをどりの第三夜。みんな順々にこゝに出て歌ふんだ。じぶんの文句でじぶんのふしで歌ふんだ。一等賞から九等賞まではぼくが大きなメタルを書いて、明日枝にぶらさげてやる。」

清作もすつかり浮かれて云ひました。>

このように柏林の夜はまた、柏囃子の夜でもあるのだ。そしてそこには、以下のような笑いもふんだんに織り込まれている。

ちやうどそのとき風が来ましたので、林  
中の柏の木はいつしよに、

「せらせらせら清作，せらせらせらばあ。」  
とうす気味のわるい声を出して清作をおど  
さうとしました。

ところが清作は却つてじぶんで口をすて  
きに大きくして横の方へまげて

「へらへらへら清作，へらへらへら，ばば  
あ。」とどなりつけましたので、柏の木はみ  
んな度ぎもをぬかれてしいんとなつてしま  
ひました。

賢治はこのような笑いを『注文の多い料理店』  
の至る所にちりばめている。おそらくこの童話  
集の特色の一つは、そんなところにあると思わ  
れる。が、それはさて措きイーハトーブの世界  
は、この童話集によれば自然と人間との交感  
(correspondence) の場とでもいうべき世界に  
なっている。一郎は山猫から一枚のはがきを貰  
ってどんぐりの裁判に立ち会い(「どんぐりと山  
猫」)、けらを着た四人の百姓は黒い松の四つの  
森と話をし(「狼森と笹森、盗森」)、雪を降らす  
雪童子は人間の子供を救い(「水仙月の四日」)、  
でんしんばしらは軍歌を歌って行進し(「月夜の  
でんしんばしら」)、自然は人に語りかける。

そのとき西のざらざらのちぢれた雲のあ  
ひだから、夕陽は赤くなゝめに苔の野原に  
注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれ  
て光りました。わたくしが疲れてそこに睡  
りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だん  
だん人のことばにきこえ、やがてそれは、  
いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた  
鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。

(「鹿踊りのはじまり」)

イーハトーブの春は「水仙月の四日」のよう  
に、四月四日になって雪の舞う日もあるのだが、  
「イーハトーブ農学校の春」のようにく太陽マ

ヂックの歌はもう青ぞらいっぱい>に鳴りひび  
いて明るいのだ。

けれども今日は、こんなにそらがまっ青  
で、見てみるとまるでわくわくするやう、  
かれくさも桑ばやしの黄いろの脚もまばゆ  
いくらゐるです。おまけに堆肥小屋の裏の二  
きれの雲は立派に光ってゐますし、それに  
ちかくの空ではひばりがまるで砂糖水のや  
うにふるえて、すきとほった空気がいっば  
いやってゐるのです。もう誰だって胸中か  
らもくもく湧いてくるうれしさに笑ひ出さ  
ないでゐられるでせうか。さうでなければ  
無理に口を横に大きくしたり、わざと額を  
しかめたりしてそれをごまかしてゐるので  
す。

(略)

それはリシウムの紅焰こうえんでせう。ほんたう  
に光炎菩薩太陽マヂックの歌は空にも地面  
にもちからいっぱい、日光の小さい小さい  
葦だくだいや橙や赤の波といっしょに一生けん命に  
鳴ってゐます。(略)

楊やなぎの木の中でも樺の木でも、またかれく  
さの地下茎でも、月光いろの甘い樹液がち  
らちらゆれだし、早い萱草くわんざうやつめくさの芽  
にはもう黄金きんいろの小さな澱粉の粒がつう  
つう浮いたり沈んだりしてゐます。

崩れ掛かった煉瓦の肥溜の中にはビールのよ  
うに泡が盛り上がっている。農学校の生徒たち  
はそれを順番に桶に汲み上げて、麦畑に運ぶ。

砂土がやはらかないゝ匂の息をはいてゐ  
ます。いままでやすんでゐた虫どもが、ほ  
んやりといま眼をさまし、しづかに息をす  
るらしいのです。麦はつやつや光ってゐま  
す。雪の下からうまくとけて出て青い麦で  
す。早く走って行かう。かけさへしたらす  
ぐに麦は吸ひ込むのだ。

(コロナは八万三千十九)

わたくしたちが<sup>ヒシヤフ</sup>栝杓で肥を麦にかければ、水はどうしてそんなにまだ力も入れないうちに水銀のやうに青く光り、たまになつて麦の上に飛びだすのでせう。また砂土がどうしてあんなにのどの乾いた子どもの水を呑むやうに肥を吸ひ込むのでせう。もうほんたうにさうでなければならぬからそれがたゞひとつのみちだからひとりでもんどんさうなるのです。

イーハトーブの春は、賢治によってこのやうに描かれる。彼はさらに春の歡喜を、くさあ、春だ、うたったり走ったり、とびあがったりするがいい。風野又三郎だって、もうガラスのマントをひらひらさせ大よろこびで髪をばちゃばちゃやりながら野はらを飛んであるきながら春が来た、春が来たをうたつてあるよ。ほんたうにもう、走ったりうたったり、飛びあがったりするがいい。ぼくたちはいまいそがしいんだよ。>と書く。春の喜びの中にあつても、農学校の生徒たちは、そして農民たちも畑仕事が忙しい。忙しい中であつて、しかし、喜びをも感受する。それが賢治の狙いでもあつたらう。

イーハトーブの冬は厳しい。

けさはじつにはじめての凜々しい氷霧だつたから  
みんなはまるめろやなにかまで出して歓迎した（「イーハトーブの氷霧」）

けれどもイーハトーブの人々は冬を歓迎する。冬には冬の喜びがあるからである。

そらにはちりのやうに小鳥がとびかげらうや青いギリシヤ文字は  
せはしく野はらの雪に燃えます  
パツセン大街道のひのきからは  
凍つたしづく燦々と降り  
銀河ステーションの遠方シグナルも

けさはまつ赤に澱んでゐます  
川はどんどん氷を流してゐるのに  
みんなは生ゴムの長靴をはき  
狐や犬の毛皮を着て  
陶器の露店をひやかしたり  
ぶらさがつた<sup>たこ</sup>章魚を品さだめしたりする  
あのにぎやかな土沢の冬の<sup>いちび</sup>市日です（「冬と銀河ステーション」）

『日本近代文学大系36』（昭和46年6月・角川書店）の恩田逸夫の注によると、パツセン街道とは釜石街道、銀河ステーションとは岩手輕便鉄道土沢駅のことだという。岩手の各地の地名も、イーハトーブの世界に移項されると、このやうにヨーロッパ風の地名に変わる。もっとも、「土沢の冬の市日」の詩句のやうにそのままのものもあるが。そして、それらの混在がイーハトーブの空間の特色をなしているのである。

### 3. 飢饉の風土としてのイーハトーブ

ドリームランドとしてのイーハトーブは、既に久保忠夫、真壁仁、亀井茂らが指摘（注4）しているやうに、飢饉の風土でもあつた。

二百二十日を過ぎたのに

稲は青く立ってるよ（詩・さあれ十月イーハトーブは）

このような秋を迎える時、イーハトーブの悲劇は始まる。賢治はこの悲劇を「グスコブドリの伝記」の中に刻み込む。

グスコブド리는、<イーハトーブの大きな森のなかに生れ>た。父はグスコブナドリという名高い木樵であつた。ブド리는この父と母と妹のネリの四人で、幸せな生活を送つていた。ところが、ブドリが十になり、ネリが七つになつた時に、恐ろしいことが起つた。

その年は、お日さまが春から夏に白くて、いつもなら雪がとけると間もなく、まつし

ろな花をつけるこぶしの樹もまるで咲かず、五月になつてもたびたびみぞれ曇りがぐしやぐしや降り、七月の末になつても一向に暑さが来ないために去年播いた麦も粒の入らない白い穂しかできず、大抵の果物も、花が咲いただけで落ちてしまつたのでした。

そしてとうとう秋になりましたが、やつぱり栗の木は青いからのいがばかりでしたし、みんなでふだんたべるいちばん大切なオリザといふ穀物も、一粒もできませんでした。野原ではもうひどいさわぎになつてしまひました。

「オリザ」というのはラテン語で稲の学名のこと。つまり、その年、イーハトーブでは米が取れなかつたのである。しかも、翌年もイーハトーブはくすつかり前の年の通りで<畑には大切にしまつて置いた種子も播かれ>たのに、収穫はなく<とうとうほんたうの飢饉に>なつてしまう。こうしてグスコブドリの一家は四散してしまい、ブドリの遍歴が始まるのである。

岩手県出身の直木賞作家三好京三が、「グスコブドリの伝記」、イーハトーブの農民」(注5)の最後にくまことに、テーマから、表現のディテールに至るまで、「グスコブドリの伝記」は、岩手県の農民の物語なのである。>と書いているように、イーハトーブはまた、飢饉に悩まされてきた日本の東北「岩手県」でもあった。

宮沢賢治の入学した盛岡高等農林学校は農業による東北振興のために創設された。東北でも特に岩手県は冷害に悩まされてきた地域であった。事実、岩手に生れ、岩手で育つた私自身、今は亡き明治11年生まれの祖母に飢饉(ケガチ)の時にわが子を食っていた女の話を聞いたことがあるし、郷里には飢饉に備えて穀物を蓄えておいた建物だと伝える郷倉が残っていた。盛岡

高等農林学校の初代校長玉利喜造は、この凶作の研究に取り組むことになる。この夏(1995年8月)、私は以上のことを調査するために、岩手県立図書館と岩手大学図書館を訪問した。以下そこで調査した結果(注6)をもとにして述べてみたい。盛岡高等農林学校の門前弘多教授のまとめた『東北地方古今凶饉誌』によると「凶作」と「飢饉」とは以下のように説明されている。

<凶作とは通例作物の成育登熟の不良なる事をいふので一般に二割位以上の減収を凶作といひ一割内外を不作といひ四、五割以上を特に大凶作といふも確然たる範囲がない。(略)飢饉とは外々人々が食糧不足して飢饉に迫る状態をいふので旧幕時代の如き所謂封鎖経済の社会に於ては大凶作の年及其翌年は殆ど常に飢饉状態になつた。岩手県地方では飢饉凶作の事を「ケカチ」又は「ガシ」と唱ふるが前者は多分飢渴をナマリたるものと思はれ後者は餓死にて昔は凶作即ち飢饉餓死であつたから両者共通に用ゐられたものであろう。>

同書によると、記録の多く残っている徳川時代慶長16年から慶応2年までの250年間に、東北では約100回もの凶作があつたと述べられている。2~3年に1回凶作は襲つて来たことになる。

明治に入つてからは、明治2年、明治17年、明治30年、明治35年、明治38年、大正2年、昭和6年、昭和9年、昭和10年が凶作の年であつた。その中から明治38年の岩手県の記述を次に引用しておきたい。

明治卅八年には七月中旬までは氣候適順なりしを以て稲の生育良好なりしも同月下旬より氣候に変調を來し降雨多く日照少く八月に入りて益烈しく氣温日照時間等平年に比し甚だ劣り雨量は三百四十五耗にして

平年の二倍以上に達し殆ど毎日陰冷にして  
 袴羽織等を着用せり。尚風向を見るに六、  
 七月には北東及び西風流行し八月には西風  
 及び北東風流行し九月に入りて気候一度恢  
 復し南風を交へたるも同月中旬より再び偏  
 東風又は北風に伴ふて気温低下し冷湿とな  
 れり。されば海岸地方に於て被害多く山岳  
 森林によりて遮蔽せらるゝ地方程被害少な  
 く北上山脈以東と以西とにては被害の度に  
 大差あり海岸に山少き宮城福島等に害多く  
 中央山脈を距てたる秋田山形等は被害少な  
 かりき。

この明治38年の凶作は、最も酷烈を極め、天  
 保以後その比を見ないものだったという。当時、  
 盛岡高等農林学校教授だった関豊太郎は、その  
 凶作原因について沿岸の潮流と陸地の気候に関  
 係する材料の調査を命ぜられた。彼は明治35年  
 と明治38年の凶作についてその原因を調査し、  
 その報告書をまとめた。その報告書は校長玉利  
 喜造の副申と共に明治40年4月15日と16日の官  
 報第7134号・第7135号の「学事」欄に掲載され  
 た。それによると、報告書の内容は以下のよう  
 な構成になっている。

#### 緒言

- 第一項 気候ノ異常
- 第二項 海流ノ変動
- 第三項 漁況ノ異常
- 第四項 水温ノ異常
- 第五項 結論

以上の中から、ここには結論としてまとめら  
 れている8項目を引用しておこう。

- (一) 凶年ニ於テハ夏期偏東風即チ海風流  
 行シ温度低ク曇天多ク日照時間少クシテ  
 多量ノ降雨之ニ伴フコトアリ
- (二) 凶年ニ於テハ西海岸ハ東海岸ヨリ温  
 度高ク日照時間モ多ク南東風即チ陸風流

行ス

- (三) 凶災ノ程度ハ東海岸ニ酷烈ニシテ西  
 海岸ニ比較的輕微ナリ又東海岸ニ連レル  
 平地ニ於テハ概ネ海浜ニ酷烈ニシテ海岸  
 ヲ遠カルニ從テ輕減スルノ傾向アルノミ  
 ナラス山岳ヲ以テ圍レ風陰ト為ルノ地ニ  
 於テ被害ノ極テ少キヲ見ル
- (四) 右三款ニ於テ之ヲ見ルニ海風ノ凶年  
 気候ノ一原因タルコト明ナリ
- (五) 海流ニハ年々多少ノ変動アリ時ニハ  
 其変動ノ著大ナルコトアリ凶作ハ春夏ノ  
 候ニ至ルモ寒流其勢ヲ逞フスルノ年ニ超  
 ユルノ傾向アリ
- (六) 漁況ハ海流ノ変動及水温ノ高低ヲ察  
 知スルノ好材料ト為ル例ヘバ寒流魚ノ漁  
 獲盛ナレハ寒流ノ勢力ヲ逞フスルヲ知り  
 近海ニ於テ暖流魚ノ大漁ヲ見ルトキハ暖  
 流ノ近接シ来リタルヲ示スカ如シ
- (七) 海岸ニ近キ海水ノ温度ハ勿論気温ノ  
 影響ヲ受クレトモ一方ニ於テハ海流変動  
 ノ結果トシテ著シク温度ノ差ヲ生スルモ  
 ノトス即チ暖流盛ニ近海ヲ流ル、トキハ  
 海岸ノ海水ハ自ラ温暖ト為ルヘク之ニ反  
 シテ寒流其勢力ヲ逞フスルトキハ高緯度  
 ノ冷水頻ニ南下シ来ルヲ以テ海岸ノ海水  
 自ラ寒冷ト為ルヘシ
- (八) 水温ノ高低ト陸作ノ豊凶トハ相伴フ  
 モノ、如シ此事実及第五款ノ事実ニシテ  
 精確ニ証明セラルニ至ラハ東北ニ於ケル  
 凶作ノ予想ハ不可能ニアラサルヘシ

凶作原因調査報告にはどうしても上記(八)

に述べられているように凶作の予想が付せられ  
 がちである。なぜならば、凶作を未然に防ごう  
 とすれば、その予想をする必要があるのだから。  
 さもなければ、凶作を事前に防ぐことはできな  
 い。しかしながら、それには現在以上に正確な

気象の予報が必要になる。そしてそれは、おそらく不可能であろう。にもかかわらず、玉利喜造校長の副申にもく早く既ニ四五月ニ於テ国ノ豊凶ヲ予知シ得ハ>と凶作の予知に関しての希望が述べられていた。そればかりではない。玉利喜造校長はそのことに関して講演の中でも触れ、それが「凶作と燕麦」と題して『農業世界』第二巻第四号に掲載された。関豊太郎の前任者として農業気象を担当したことのある農学博士稲垣乙丙農科大学教授は、玉利の「凶作と燕麦」と官報に掲載された関の報告書を読み、『日本農業雑誌』に「凶作は予知し得可き乎（玉利博士の妄想と関学士の謬論を駁す）」（注7）「豊凶は予知し得べきか（続稿）」（注8）の二文を書いて、それに厳しい批判を加えた。実は『日本農業雑誌』には、既に玉利博士の凶作予言と関説に対する批判が掲載されていた。稲垣博士の前者の文章の初めに掲げられている次の一文によって、それが分かる。

<記者曰、本誌は前号巻頭に楽天氏の筆を以て玉利博士の凶作予言の一笑に付すべきを風刺し、同じく社説欄に於て関氏の説の誤謬多きを難じたり。然るに農用気象学の泰斗たる稲垣博士亦本誌と同論なりき、即ち之を茲に掲ぐ。飛語流説徒らに地方農家の人心を擾乱せしむ可きを杞憂すれば也。>

稲垣博士の批判は、<近時頻に凶作の予知を云々するものがあつて之に就て意見を問はるゝ人々も少なからずであるから学問の為かたがた少しく論述してみやうと思ふ。>という一文で始まる。そして、玉利博士の凶作予言が矛盾撞着していることを指摘し、その説が<ドウしても非学術的な売卜者的予言>だと手厳しい。また、関学士の説は<頗る慎重に論述しているようではあるが、首肯し難い処が少なくない。>と言い、何故ならば自分の説に都合の悪いところは

取り除いてしまつてあるからだ、その資料の取捨選択のまずさを批判する。そして、続稿では関の所論を『東北の凶作は海流の変動に由来したもので海流の変動即ち親潮寒流と東察加暖流（注9）との消長如何は豊凶の岐かるゝ所である、さうして此消長は早く既に四五月に於て其端緒を見るべきであるから四五月に於ける東海水温の高低は豊凶を予示するものであるらしい。』と要約したうえで、これを<甚だ趣味ある憶説>だといひ、<従来の気象観測の結果から取調べて見たが、此憶測を確むるの証を得ずして却てその反証を得たのである。>とこれを退けるのである。ただ、海流のさまざまな変異の原因を風向の変異に求めている関の説は認めている。けれども、関の言うように<東北の海岸一体に果して凶年には主として偏北風が流行し豊年には主として偏南風流行したるや、早く既に四五月の頃より豊年と凶年との間に此の如き風向の相違がありしや、豊年には親潮を陸岸より遠ざくるの偏西風が多く吹いて凶年には反対に親潮を陸岸に吹き寄するの偏東風が多く吹きしや>と疑問を提示したうえで、関の報告書の風向調査資料とその読みの不十分であることを指摘し、明治30、34、35、36、37、38年の4～8月の青森、宮古、石巻、金山、水戸における平均風向及回数資料を引用してそれを否定するのである。

門前弘多編著『東北地方古今凶謹誌』（注10）の「参照文献目録」によると、関豊太郎は官報以外に明治40年の『農事雑報』に「東北凶作の原因に就て」と「気候予想の問題に就て」という2本の論文を書いたきり、その後は凶作に関する論文を書かなかつたようである。稲垣の批判に嫌気がさしたのであろうか。しかしながら、門前は前記編著に、関の説は<当時稲垣博士等によりて大に論難せられたるが後年安藤博士等

の研究により偏東風と凶作と関係あり偏東風は寒流の勢盛なる時に多き事が証された。>と記している。

なお、同書は凶作の原因として「早魃」「霖雨」「暴風雨」「洪水」「冷風陰雨」「霜」「雹」「雪」「病虫害」を挙げたうえで、「凶作を招来せる気象要素」の項において、青森県救荒誌、農商務省農事試験場、青森県農事試験場、青鹿四郎等の発表や調査結果、稲垣乙丙、島川久一郎、安藤廣太郎等の説を要約し、さらに次の「凶作を誘発する気象異変の原因」では、玉利喜造の凶年周期説、先に述べた関豊太郎説、安藤廣太郎の太陽黒点説、遠藤吉三郎の稲作豊凶と寒暖海流との相関説、岡田武松の（昭和9年の凶作についての）火山爆発説、その他須田、菅野、武久の各説を紹介している。そして、その後「凶作を予知し得るか」という一項を設けて、そのはなはだ困難であることに言及している。

さて、ここで先に述べた関豊太郎のことに戻らなければならない。関は明治39年、盛岡高等農林学校に赴任した。農学科第二部として農芸化学科が盛岡高等農林学校に誕生するのは、明治42年のこと。関がこの第二部の部長となったのは、大正2年のことであった。そして、大正4年に宮沢賢治がこの農学科第二部に入学するのである。

井上克弘がその著『石っこ賢さんと盛岡高等農林』に引用している小森彦太郎の「高農時代の賢治」によると、関豊太郎教授は人間的にも性格のうえでも必ずしも円満な人ではなかったらしい。（注11）しかし、賢治にとって関豊太郎は恩師であった。堀尾青史は「関豊太郎は賢治が地質学研究科を終業した一九二〇（大正九）年、東京農業大学教授に転じた。高農教授時代、稗貫郡から郡下の土性調査を依頼されたとき、即座に賢治を推薦して調査に当らせたし、研究

室にのこらせ、助教授にしようとしたのもこの先生である。>と、『年譜宮沢賢治伝』に書いている。つまり、賢治は関豊太郎のお気に入りの学生だったのである。

ところで、「グスコブドリの伝記」の中にクーボー大博士という人物が登場する。ブドリは立派なオリザを作るようにと赤鬚の主人がくれた一山の本の中で、殊に「クーボーといふ人の物の考へ方を教へた本」が面白かったので何べんも読み、イーハトーブ市にクーボーを訪ねる。ようやく訪ね当たった学校は白い建物で、その二階で誰かが大きい声でしゃべっていた。

「今日は。」ブドリは高く叫びました。誰も出てきませんでした。「今日はあ。」ブドリはあらん限り高く叫びました。するとすぐ頭の上の二階の窓から、大きな灰いろの頭が出て、めがねが二つぎらりと光りました。それから、

「今授業中だよ。やかましいやつだ。用があるならばひつて来い。」とどなりつけて、すぐ顔を引つ込めると、中で大勢がどつと笑ひ、その人は構はずまた何か大声でしゃべつてゐます。

この人がクーボー大博士である。大博士は「くせいの高い眼がねをかけた」>、「高い声」の人であった。ブドリが二階に上がって行くと、大博士は「大きな櫓の形の模型を、あちこち指しながら」>みんなに説明をしていた。

井上克弘は前に引用した著書で「クーボー大博士は、一般に盛岡高等農林学校の関豊太郎教授がモデルであると考えられている。関教授は中肉中背であるので、この点がクーボー大博士と違っているが、眼鏡をかけたすどい目つき、大きな声と短気ですぐ怒鳴るところなど、関博士の性格はクーボー大博士に非常によく似ている。」>と言い、クーボー大博士が授業で用いてい

た「大きな櫓の形の模型」を、大正5年2月に盛岡高等農林学校地質及土壤学教室が購入した火山模型がそのモデルになったと推測している。

(前略) 関は大正五年二月に購入したこれらの火山模型を、おそらく賢治が二年生になった時、地質および土壤学の授業に使ったものと思われる。この中で、箱根火山模型、阿蘇火山模型、地質説明用模型が「グスコブドリの伝記」の創作にあたって、賢治が題材として利用した模型でないかと考えられる。

まず、クーボー大博士が授業に使っていた模型について考えてみよう。ブドリが見たものは「大きな櫓の形の模型」と書かれている。またこの模型には「とって」がついていた。「とってを廻す」と、「模型はがちっと鳴って奇体な船のやうな形になり」あるいは「とってを廻すと、模型はこんどは大きなむかでのやうな形に変わりました」とある。

研究室に残っている箱根火山模型と阿蘇火山模型はちょうど模型の真ん中のところでやや斜めに真つ二つに切られ、取っ手で連結されている。取っ手ははずすと、火山地形の断面が見られるようになっている。

(略) したがって、阿蘇火山模型と箱根火山模型が二つに分離された時、その形が「奇体な船」のように、また火山地形の模型の断面図が「大きなむかで」のように賢治には見えたのではないだろうか。またクーボー大博士が黒板にどンドン書いていった図とは、これらの模型にみられる火山模型の断面図あるいは地質説明模型の断面図であったと考えることができる。(略)

クーボー大博士のように、関教授は、授業

においてこれらの模型に見られる火山地形の断面図を黒板に書いて、火山地形を説明したのではないだろうか。富士火山、箱根火山、阿蘇火山は、日本でも代表的な成層火山である。(略) ブドリが思った「歴史の歴史」とは、火山地形の断面に見られる火山活動の歴史、成層火山の形成の長い歴史のことを指しているのではないだろうか。大正五年二月に購入された火山地形の模型の発見は、「グスコブドリの伝記」のクーボー大博士のモデルが、盛岡高等農林学校地質及土壤学教室の関豊太郎教授であったことを裏付ける十分な証拠であるといえよう。

だいぶ引用が長くなったが、著者が岩手大学農学部の教授であり、上記の模型の存在を確認していることからみて、極めて説得力を持つ説だと考えてよかろう。続けて氏はくクーボー大博士が火山の専門家であれば、イーハトーブ火山局技師のペンネンナムと親しかったこと、ブド리를イーハトーブ火山局に仕事を紹介したこと、「サンムトリ火山」や「カルボナード火山島」の火山噴火の制御にブドリやペンネンナム技師と一緒に取り組んだことなどが容易に理解できる。>と述べている。教えられることの多い説である。

井上の指摘するように、関豊太郎がクーボー大博士のモデルだと考えると、賢治が「グスコブドリの伝記」の「九、カルボナード島」の中で次のように表現しているのは、まことに興味深い。

そしてちやうどブドリが二十七の年でした。どうもあの恐ろしい寒い気候がまた来るやうな模様でした。測候所では、太陽の調子や北の方の海の氷の様子からその年の二月にみんなへそれを予報しました。(略)

クーボー大博士も、たびたび気象や農業の技師たちと相談したり、意見を新聞に出したりしましたが、やっぱりこの烈しい寒さだけはどうしてもできないやうでした。

つまり、ここを読むと我々はいよいよ明治40年の官報に掲載された関豊太郎の報告書や、その他の雑誌に載った論文を思い起こさずにはいられないのである。と同時に、ブドリを関豊太郎の愛弟子賢治の、物語の中へと変身した姿であったかと、納得せざるを得ないのである。かくしてわれわれは、宮沢賢治の「グスコブドリの伝記」を、飢饉の風土であるイーハトーブ（岩手県）を文学空間とした物語、とみなすことができるのである。

イーハトーブの飢饉は夏の寒さによってもたらされ、火山灰によってもたらされる。その受苦に耐えてブドリは成長していく。そして、赤鬚の主人のくれた本によってクーボー大博士を知り、その教えを受ける。先に引用したように、ブドリが二十七になった年、イーハトーブには飢饉の徴候が現れる。ブドリは居ても立ってもいられなくなりクーボー大博士のうちを訪ねる。

「先生、気層のなかに炭酸瓦斯が増えて来れば暖くなるのですか。」

「それはなるだらう。地球ができてからいままでの気温は、大抵空気中の炭酸瓦斯の量できまつてると云はれる位だからね。」

「カルボナード火山島がいま爆発したら、この気候を変へる位の炭酸瓦斯を噴くでせうか。」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、瓦斯はすぐ大循環の上層の風にまじって地球ぜんたいを包むだらう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度位 <sup>あたたか</sup>温にするだらうと

思ふ。」

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでせうか。」

「それはできるだらう。けれども、その仕事に行つたもののうち、最後の一人はどうしても <sup>に</sup>遁げられないのでね。」

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るやうにお詞 <sup>ことば</sup>を下さい。」

しかし、クーボー大博士もペンネン技師も承知しようとはしない。ペンネン技師はむしろ年の若いブドリではなく六十三になる自分が犠牲になると言う。ブドリはもしこの仕事に失敗したならば、次にこの仕事をやる人間がいなくなるのではないかとペンネン技師を説得して、結局自分が犠牲になるのである。

それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。そこへいくつものやぐらは建ち、電線は連結されました。

すつかり仕度ができると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そしてその次の日、イーハトーブの人たちは青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅いろになつたのを見ました。けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖くなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといつしよに、その冬を暖いたべものと、明るい薪で楽しく暮すことができたのでした。

「グスコブドリの伝記」はこのようにして幕を閉じる。ブドリは「捨身」によってイーハ

トープの人々を救う。井上克弘はカルボナード島の「カルボナード」について「炭酸塩を意味する英語 (carbonate) からとった名前ではないか」(前引書)と言っているが、そのようにこの火山は炭酸瓦斯だけを噴き上げて火山灰の被害はもたらさなかった。そして、現在、炭酸瓦斯の濃度の増加が地球の温暖化の原因であると言われているように、それによってイーハトーブの人々は冷害から免れて幸せを得たのである。このような、人々全体の幸せこそ賢治の理想とするところであった。そのために自分が「捨身」することは、賢治の希望するところであった。つまり、ブドリは賢治の理念だったのである。

#### 4. 賢治の実践

賢治はブドリとはまた違った仕方でイーハトーブに尽くした。大正十五年、花巻農学校内の岩手国民高等学校において「農民(地人)芸術」の講義を担当。人々にく(我等農民は)もっと明るく生き生きと生活する道を見付けなければならない、(略)世界が全体真実に幸福にならないうち一人の幸福はあり得ない、(略)我等は吾等の新たな道を履み吾等の美をば創り出さねばならぬ、芸術をもてあの灰イロの労働を燃せ、(略)化学の爲め農業は今日の如くなつたが、之れをにくまず之を利用応用すればいゝのである、(略)吾れ吾れは新たな美を創る、(略)農民芸術とは宇宙精神の地人の個性を通<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>ざる具体的な表現である、(略)我等の芸術は新興文化の基礎である (略)之れからの芝居は人生劇場なり即ちイーハトーブ農民劇団なり 農民は生産的享樂を得たいものである、(略)其の村で同一の副業せんとするのは時代遅れである、(略)世界と吾等の正しく明るい未来に関し大なる希望を先ず起せ、此の共通の希願に依って互に堅く

相結び個性によりて各各生きよ、即ち個人主義である (略)世界の心を心として正しく強く生きよ、>(注12)と説いた。ここで我等農民というのは、賢治の意識においては勿論彼自身も含まれていた。そして、彼はそれを実践するように、同年、花巻農学校の教師を辞し、下根子桜の別宅で独居自炊生活を始め、自ら耕作をし、羅須地人協会を設立する。羅須地人協会ではく農村青年や篤農家に稲作法、科学、農民芸術概論などを講義>(注13)した。翌昭和2年には、2000枚に及ぶ肥料設計書を作成したという。さらに昭和3年には、肥料稲作巡回相談を行った。この年の夏は旱天で、賢治は稲作指導に奔走し、発病してしまう。その後、昭和8年9月に没する迄、彼は農民の相談に乗っていた。次の詩にはその様子がよく表現されている。

あすこの田はねえ

あの種類では

窒素が余り多過ぎるから

もうきつぱりと<sup>みづ</sup>灌水を切つてね

三番除草はしないんだ

……一しんに畔を走つて来て

青田のなかに汗拭くその子……

燐酸がまだ残つてゐない?

みんな使つた?

それではもしもこの天候が

これから五日続いたら

あの枝垂れ葉をねえ

斯ういふ風な枝垂れ葉をねえ

むしつて除つてしまふんだ

……せわしくうなづき汗拭くその子

冬講習に来たときは

一年はたらいたあとゝは云へ

まだかゞやかなりんごのわらひ

を持つてゐた

今日はもう日と汗にやけ

幾夜の不眠にやつれてみる……

〔稲作挿話〕〈未定稿〉)

それからいゝかい  
 今月末にあの稲が  
 君の胸より延びたらねえ  
 ちようどシャツの上のボタンを定規にして  
 ねえ  
 葉尖をとつてしまふんだ  
 ……汗だけでない  
 涙も拭いてみるんだな……

君が自分で設計した  
 あの田もすつかり見て来たよ  
 陸羽百三十二号のはうね  
 あれはずるぶん上手に行つた  
 肥えも少しもむらがないし  
 いかにも強く育つてゐる  
 硫安だつて君がじぶんで播いたらう  
 みんながいろいろ云ふだらうが  
 あつちは少しも心配ない  
 反当三石二斗なら  
 もう決つたと云つていい  
 しつかりやるんだよ  
 これからの本当の勉強はねえ  
 テニスをしながら商売の先生から  
 義理で教はることでもないんだ  
 きみのやうにさ  
 吹雪やわづかの仕事のひまで  
 泣きながら  
 からだに刻んで行く勉強が  
 まもなくぐんぐん強い芽を噴いて  
 どこまでのびるかわからない  
 それがこれからのあたらしい学問のはじま  
 りなんだ  
 ぢやさようなら  
 ……雲からも風からも  
 透明なエネルギーが  
 そのこどもにそゝぎくだけ……

注

- (注1) 恩田逸夫『宮沢賢治論3 童話研究他』(1891年10月27日・東京書籍(株)刊)の「賢治童話の造語例」の章。
- (注2) 原子朗編著『宮澤賢治語彙辞典』(1989年10月14日・東京書籍(株)刊)の「イーハトヴ」の項。
- (注3) (注2)と同辞典の当該項に「night」とあるが、おそらく「nicht」のミスプリントであろう。
- (注4) 久保忠夫「賢治と東北」(『解釈と鑑賞』昭和48年12月号・至文堂)。真壁仁「賢治と飢餓(けがち)の風土」(『国文学』昭和50年4月号・学燈社)、後、『鑑賞日本現代文学13・宮沢賢治』(昭和56年6月30日・角川書店)に再録。亀井茂「宮沢賢治と盛岡高等農林学校断片(一)―玉利校長と関豊太郎の冷害研究をめぐって(上)、(中)、(下)」(『早池峯』昭和60,61,62年の12月)。
- (注5) 『国文学』(昭和53年2月号・学燈社)所収。
- (注6) 1995年8月22日、23日の両日、盛岡市に岩手大学図書館と岩手県立図書館を訪ねた。あらかじめ、書面で調査のお願いをしておいたので、既に色々な資料を用意して下さっていた。その時、親切にお世話下さった岩手大学図書館の学術情報係の佐々木厚子氏、ならびに、岩手県立図書館の副主幹兼参考調査係長権谷徹氏には、この機会に、厚くお礼を申し上げたい。
- さて、岩手大学図書館では、以下の資料を見せていただいた。

「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書」

「凶作調査参考資料」第一集 (和紙・  
和綴じ・墨書)

- 一 凶作見聞集
- 一 明和以来豊凶取調
- 一 雑記

「凶作に関する研究」第一報, 第一報  
別冊, 第一報付録, 第二~九報

「凶作関係文書綴」

- 一, 卯の凶作ニ付諸事覚書
- 一, 天保年間凶作の模様
- 一, 天保四癸巳年凶作ニ付諸事覚  
書帳
- 一, 田舎大淵噺
- 一, 救荒誌ノ内 救荒書目の部
- 一, 凶作救済方法 (岩手県)
- 一, 自明治二十八年至明治三十七  
年 拾ヶ年間米麦其他作付反別  
及収穫調
- 一, 明治十年以降岩手県米産額
- 一, 岩手県産米調査 (明治一年ヨ  
リ明治三十八年)
- 一, 既往十年間食料品輸入高 (宮  
城県)
- 一, 作物作付, 収量調 (青森県)

「凶作調査参考資料」

- 第一集 凶作見聞集, 明和以来豊  
凶取調, 凶年食物製造法,  
農民労力ノ解説, 農具凶解  
目録
- 第二集 凶荒誌  
已飢申饞録, 救荒略, 辟  
瘟法及瘟疫治法合解, 社倉  
解話, 附十倍粥之法
- 第三集 天保四年癸巳凶作氣候  
録, 天保飢饞百人一首

第四集 天保荒歳物語

第五集 著聞集

天保飢饞

- 第六集 一 濫觴日誌抜萃
- 二 天保四癸巳年凶作日  
記, 当領内御百姓八戸  
願, 筋留覚帳
- 三 天明凶年記集覽
- 四 津軽地方凶荒一件  
甲
- 五 〃
- 乙

第七集 一 救荒便覧前集

- 二 〃 後集上
- 三 〃 〃 下
- 四 〃 続集
- 五 五穀無尽蔵
- 六 郷村古実見聞記上
- 七 〃 下

第八集 一 孫謀録上

- 二 〃 中 ……
- (「下」は見当たらなか  
った。)

第九集 一 民間備荒録 (奥州一  
関侍医清庵建部由正元  
策甫著)

- 二 救荒事宜
- 三 丙丁録

第十集 一 飢饞考卷壱

- 二 〃 卷弐
- 三 〃 卷参
- 四 〃 卷四
- 五 〃 卷五
- 六 〃 卷六
- 七 〃 卷七
- 八 〃 卷八

九 〃 卷九

(全10集31冊)

門前弘多編著『東北地方古今凶謹誌』  
(昭和11年7月1日・盛岡高等農林学  
校)

『回顧六十年』(岩手大学農学部)

『岩手大学農学部七十五年史』(昭和  
54年7月10日・(東京)教育文化出版)

井上克弘『石っこ賢さんと盛岡高等  
農林一偉大なる風景画家宮沢賢治一』  
(平成4年5月16日・(株)地方公論  
社)

以上の他にも、貴重な資料を見せて  
いただいた。また、岩手県立図書館で  
は以下の資料を拝見した。

門前弘多編著『東北地方古今凶謹誌』  
(昭和11年7月1日・盛岡高等農林学  
校)

『日本農業雑誌』(読売新聞日就社発  
行)の明治40年7、8月号。

「官報」第7134号、第7135号(明治  
40年4月15日、16日)

本論の以下の項は以上の資料に拠る  
ものであることを、お断りしておく。

(注7) 『日本農業雑誌』第貳巻第拾壹号(明  
治40年6月5日刊・読売新聞日就社)  
の8ページ。

(注8) 『日本農業雑誌』第貳巻第拾貳号(明  
治40年7月5日刊・読売新聞日就社)  
の19ページ

(注9) 東察加暖流というのは関豊太郎の報  
告書のなかの説明によると、<黒潮ノ  
一派ニシテ北緯三十八度ノ辺ヨリ発シ  
北北東ニ向ヒ三陸ノ海岸乃至千島列島  
ニ沿フテ親潮ノ外界ヲ走り遂ニペーリ  
んぐ海ニ達ス其西端ハ海岸ヲ距ルコト

五十湊内外ナリト云フ其速度本州東海  
岸沖ニテハ一湊余ナレトモ千島ノ北端  
ニ至レハ四分ノ一乃至半湊北緯五十度  
ノ辺ニテハ一時其跡ヲ晦マスト云フ東  
察加暖流ニ付キテハ詳細ナル記載ヲ欠  
クヲ以テ俄ニ之ヲ断定シ難シト雖モ恐  
ラクハ冬期ニ於テ流速ヲ減シテ縮少シ  
強勢ナル親潮ノタメニ海岸ヲ遠ケラ  
ル、モノ、如シ>

(注10) 門前弘多編著『東北地方古今凶謹誌』  
(昭和11年7月1日・盛岡高等農林学  
校)

なお本書は、第一「緒言」から第十  
三「凶作に周期があるか」までと、附  
録「参照文献目録」によって構成され  
ている。その第十一「凶作の原因」の  
項に諸説が要領よく纏められている。

(注11) このことに就いては堀尾青史『年譜  
宮澤賢治伝』(1991・2・10・中央公論  
社)にも同じことが書かれている。関  
豊太郎が予算のことで校長をどなりつ  
けた話、ノックせずに研究室に入った  
学生をつまみ出したこと、黒板の文字  
を消し忘れた外国語の教師を殴りつけ  
た話。そのようなことからライオン先  
生とあだ名されていたという。なお、  
この著書に研究室勤務の小森盛太郎と  
あるのは井上が小森彦太郎と書いてい  
る人と同一人物なのであろうか。

(注12) 『校本宮沢賢治全集第十四巻』(昭和  
52年10月30日・筑摩書房刊)収載の伊  
藤清一のノート「講演筆記帳」から引  
用した。

(注13) 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』  
(1991・2・10・中公文庫)による。